



禁断の星域

―― プロローグ ――

それは現在から遥か十五世紀ほど先の話。

他の星系にまで進出した人類は、幾つかの植民星を開拓していた。

相も変わらず人類は戦火を交える事を好み、第五植民星ソドムと第六植民星ゴモラとの間では、世紀をまたぐ惑星間戦争が続いていた。

双方共に、惑星ごと破壊出来る最終兵器を有しながらも共倒れになる事を恐れ、それを使用する事は無かった。

通常兵器による泥沼の戦いは膠着状態のまま、百五十年にも及んだ。

『禁断の星域』

完全なる静寂が支配する宇宙空間。

多くの星達が誕生するこのエリアでは、膨大な量のガスや塵が密集して、漆黒のキャンバスを賑やかな色彩のアートで彩っている。

その中にひときわ明るく、二つの恒星が輝いていた。これらは双子星で一つの系の中心となり、複雑な軌道を回る幾つかの惑星を従えていた。

第五植民星ソドムと第六植民星ゴモラは、この星系の第三、第四惑星にあたる。

この星系には更に、公転の楕円軌道自体が回転してずれて行く特殊な惑星が存在した。

それはまるで血吸い花のように紅く、妖しくも美しい星だった。

今この時、第五植民星ソドムから飛び立った一隻の小型宇宙船が、その一輪の妖花に向けて、一筋の軌跡を描いていた。

「クインシー、本当に巨人は居たと思うかい？」

ライオネルはシートにもたれて頭の後ろに手を組むと、コントロールルームの上部に映し出された紅い惑星を見つめた。

「さあな。しかし、今回の搜索は軍の中でも極秘の特別任務だ。まんざら根拠の無い物でもなからう」

軌道修正プログラムを非接触型のコントロールボードから入力し終わると、クインシーもシートをリクライニングし脚を組んだ。

この二人、ため口を利いてはいるが、れっきとした上司と部下の関係である。

クインシーが曹長、ライオネルが軍曹であるのだが、幼なじみであるが故に普段の会話はこのようにラフになるのだった。

彼等の眼前のディスプレイには、巨大な紅い花を思わせる星が浮かんでいた。

「ラフレシア・アーノルディか……」

クインシーがその名を口にする。

人類の本星である地球には、直径が一メートルにもなる紅い巨大花が存在すると言う。この名はその花から付けられたのだと、軍学校で学んだ記憶が有る。

妖花の如く幻想的な美しい光景は、媚薬のように計り知れない魅惑を秘めていた。

「実際、巨人の遺跡が有ったとして、どうするんだ？ 任務の具体的内容は？」

ライオネルは両手を頭の後ろに組んだまま、クインシーに顔を向けた。

「我々の任務は遺跡の搜索と調査だ。そして可能ならば伝説に謳われる紅い巨人の力を手に入れる、……という事なんだがな」

クインシー自身、巨人の伝説には懐疑的であった。それにもし巨人の伝説が真実な物だったとしても、その力が軍の役に立つなどとは到底思えなかったのである。

しかし、これは総司令官からの直命であって、断る選択肢は用意されていなかった。

二人の生まれ故郷、第五植民星ソドムには、いつの頃からか紅い巨人の伝説が存在した。

〈紅い巨人の力を手に入れた者は、宇宙を支配する〉

その紅い巨人の伝説の発祥の地が惑星ラフレシア・アーノルディなのだが、送り込まれた無人探査機によれば、植物の僅かな生命反応さえも捉えられない死の星という事だった。

一方、表向きには、何故か全ての植民星の間でこの惑星は禁断の星とされ、何者も降り立つ事は許されなかった。それは宗教的タブーであり、根拠となる明確な理由を知る者は、誰一人として無かった。

「禁断の星に降りるのは何か怖くないかい？」

少し不安気にライオネルが聞いた。

「別に……。任務だからな」

ラフレシアを見つめたまま、クインシーがぶっきらぼうに答える。

「オレは……。とても怖い。二階級特進が約束されてなければ、この場を逃げ出したいくらいだ。きっと神の怒りに触れるんじゃないかと思う」

そう言いながら、ライオネルは胸の前で十字を切った。

クインシーが苦笑する。

「まあ、目的さえ果たせばすぐに引き上げるさ。バーも無いし女も居ないからな。千年に一度のチャンスなんだ。絶対にモノにしてみせるさ。帰還した時には、俺は少尉でお前は准尉だ」

搜索と調査だけでも二階級特進が約束されていた。まんざら悪い話でもない。それに偶然にでも巨人の力を見つければ、それ以上の報償が待っているのだ。

ラフレシアの軌道は非常に特殊で、千年に一度だけソドムに最接近する。それが今、この時期なのである。小型宇宙船で秘密裏に探索を行うには千載一遇の機会と言えた。

数時間後、二人の乗った小型宇宙船はラフレシアの重力圏内に入り、ランディングのため成層圏へと突入して行った。

大地の色を反射した薄紅の雲間を抜けた宇宙船は、数機のノズルからイオン化ガスを噴射し、砂塵を巻き上げながら赤茶けた荒野へと着地した。

各種計器類が分析結果をはじき出す。

酸素は薄く重力もかなり弱いものの、大気組成はソドムの物とさほど変わらなかった。大地は酸化鉄が多く含まれ、そのせいで赤茶けていた。

昼夜間の気温の大きな変動と未知の細菌類に気をつければ、人類が活動の拠点とする事は十分に可能な星と思われた。

真っ白な宇宙服に身を包み、大地に降り立つ二人。

ヘルメットの透明なシールド越しに見える光景は、一面の赤茶けた荒野とはるか遠くに見える岩山ばかりだった。

二人は宇宙船から降ろしたバギーに乗り込むと、タイヤの跡を砂に刻みながら荒れ地を走り出した。

幸いな事に、時期的に二つの太陽がこの星の裏表に位置するので、日が暮れる心配は無い。

時々巻き起こる砂嵐に翻弄されながらも、果てしなく思える道のりを先へ先へと進んで行く。

荒野は小振りな岩と砂ばかりで、特に目につくような物は見当たらない。バギーに備え付けた測定器にも特に何の反応も見られなかった。

バギーの振動で腰に痛みを感じ始めた頃、ようやく山々の麓に辿り着いた。

黄色味を帯びたそれらの山肌は、宇宙から見たラフレシアの花の中央に当たる部分だった。

無人探査機のデータから既に判っていた事ではあったが、山の麓周辺にも僅かな植物さえ見当たらず、生命反応は皆無だった。

千メートルは有ろうかという切り立った断崖絶壁。それを左右両側に見上げる谷間にバギーを止め、二人は降り立った。

「これはっ?!」

岩肌を仰ぎ見たライオネルが、思わずバランスを崩しよろける。

「壁画だ……、デカイ！」

クインシーは、写りの良さそうなアングルを探し画像記録を開始する。

自分達を挟み込むように左右から見下ろす巨大なその壁画。

全高三百メートルは有るだろう。

近すぎて全体像がいまひとつ判りにくい。

ライオネルは少し後ろに下がり、再度見上げた。

「人か？」

確かにそれは人のようにも見える。

「いや……、巨人だ！ 下の方を見ろ！」

クインシーが指し示した場所には、その百分の一にも満たない大きさの人々の姿が何体も描かれていた。

巨人を崇め奉り、それに仕える人々……。

まさにそのような言葉がピタリと当てはまる壁画だった。

「これが、伝説の巨人……。足元の人々は、この星の原住民なのか……？」

その圧倒的な威圧感に、ライオネルは鳥肌が立つ。

「この先に巨人の力が眠っているという事か……」

クインシーが見つめる先、それは険しい道のりに見えた。だが巨人の痕跡が確認出来た以上は先に進むしかないのだ。

多くの岩が散乱しているため、ここからはバギーを諦め徒歩で行く事になる。

二人は調査の為の機材を背負うと、谷間の奥に向かって歩き出した。

崩落し積もった岩の上を越え、不安定な足場に気を配りながら先に進む。

荷物はかなりの分量ではあったが、この星の重力がソドムの約五分の一しかないため、さほど苦にはならなかった。

それよりも問題は道だった。

崖の崩落が激しく、頻繁に大きな岩を迂回しなければならない。僅かばかりの距離を進むのにも、かなりの時間を要した。

身の丈の五倍程は有ろうかという大きな二つの岩の間を抜けた時、二人の目の前に絶壁が立ちはだかった。

左右の崖の幅は狭まり二十メートルも無い。恒星の光は絶壁に遮られ辺りは薄暗い。遙か千メートル上に見える細い線になった空が、僅かばかりの光源だった。

「行き止まりか？」

ライオネルは荷物を降ろし、近くの岩に腰掛けて荒くなった息を整えた。ヘルメット内に有るチューブをくわえると、宇宙服に内蔵された小型タンクから流れて来た飲料水が喉を潤す。

クインシーも荷物を降ろすと周囲を見回した。

ヘルメット上部に備えられたライトを点灯し、目の前の絶壁をつぶさに調べ始める。

「おいおい……。少しくらい休ませてくれよ！」

ライオネルも仕方なく腰掛けていた岩から立ち上がると、ライトを点灯する。

その瞬間、眼前に照らし出された光景がライオネルを叫ばせた。

「おいっ！ クインシーっ！ 通路だ！ 通路が有ったぞっ！」

それは高さ三メートル、幅二メートル程に、幾何学的な美しさでくり抜かれていた。

かなり奥深いようで、ライトで照らしても暗闇の先は見えない。

周囲に気を配りながら、恐る恐る足を踏み入れる。

通路を入ってすぐの壁や天井には、壁画と象形文字に似た模様が一面に描かれていた。

「この文字、解読出来るか？」

クインシーが振り返るとライトが逸れて、壁画と文字は暗闇に埋もれた。

「前を向いててくれよ、見えなくなっちゃう」

小型の装置を忙しそうに操作するライオネルの言葉に、クインシーは再び壁の方を向き、自らのライトで通路の壁を照らし出す。

「ほんの一部しか解読出来ないが……。どうやら紅い巨人について書いてあるみたいだ」

解読した壁画の文字をライオネルがゆっくりと読み上げる。

「……大いなる王、天空より舞い降り……。その背丈たるや、山の如く……。怒りし様、神の如し……。腕より伸びし剣、月を二つに裂かむ……」

「月を二つにだっ？！ それが巨人の力なのか？！ その先は？」

「この先は解読出来ない……。あ、ちょっと待ってくれ。他の部分が少し解読出来そうだ」

ライオネルは装置を反応の強い部分に向けると、再び読み上げた。

「……生け贄の血、王の身を鮮やかに紅く染むる……」

「解読出来るのは、ここまでだ」

解読機のディスプレイには、エラーの文字が点滅していた。

「生け贄？！ 悪趣味だな……。虫酸が奔るよ。一体、紅い巨人とは何者だったんだ？」

「これだけじゃ、はっきりとは判らないよ。他の星からの侵略者だったのかもしれないし。ただ、その武力も残虐さも、尋常じゃなかったって事は確かだな」

不快な表情を露にするクインシーに答えると、ライオネルは十字を切り神に祈りの言葉を捧げる。

不気味な重苦しさに包まれながら、二人は暗黒の通路の奥へと歩を進めた。

通路の所々には、同様の壁画や象形文字が描かれていたが、そのほとんどは自然の浸食も重なり解読不能だった。

二十分程進むと、ようやく出口の明かりが差し込んで来た。二人は冥界の底から逃れるように歩調を速め、その光源を目指す。

通路を勢い良く抜け出ると、溢れる光に目が眩んだ。

瞳孔が光量に慣れ、次第に辺りの景色を視覚が認識し始める。

一面に開ける空間。

砂埃で黄色く煙る大気に浮かび上がる物影。

直径数キロにも及ぶ古代都市の遺跡が、そこには在った。

思わず息を飲む。

周囲はぐるりと高さ約千メートルの絶壁に囲まれて、自然の城壁のようにになっている。

二人は真正面の絶壁の手前に見える、半ば崩れかかった神殿と思しき建造物を目指す事にした。

一面の黄土色。岩を削って積み上げた住居の跡が連なる。

はたしてどのような原住民が暮らして居たのか。

次々と刺激を与える文化の残骸は、いとも簡単に二人の想像力をオーバーロードさせた。

道が大きな石畳になると、建築物も大規模な物が多く連なってくる。

一度は他の建物の陰に隠れてしまった神殿の上部が、近づくに連れ再び見え始める。その荘厳な姿は二人の目を釘付けにした。

しかし、やがてその神殿以上に二人の興味を惹く物が現れる。

砂埃に煙って、かなり近づくまでその存在に気付かなかったのだ。

正面の崖の絶壁に掘られた巨大な祠。

そしてその中、玉座に座す巨大な石像。

それはまるで待ち兼ねていたかの如く、二人を見下ろしていた。

「これが伝説の紅い巨人……なのか？ 紅くないが……」

荷物を降ろし、クインシーは真正面から石像を見上げた。祠と共に絶壁に掘り出された物だろう、周囲の岩肌と同じ黄土色をしている。

「さっさと用事を済ませて帰ろうぜ。なんか嫌な予感がする」

祈りの言葉を小声で唱えながら、ライオネルは早速幾つかの測定器を石像に設置していく。

「これさえ終われば二階級特進が待っているんだ。そうすりゃ家族にも少しはいい思いをさせてやれる。待ってろよ、もうすぐ帰るぞ。さてと……、設置完了だ。スイッチ・オン！」

ライオネルがスイッチを入れると、幾つかの測定器のディスプレイが同時に波形を描き、数値をはじき出し始めた。

ディスプレイに次々に表示される結果を覗き込みながら、ライオネルは首を傾げる。

「クインシー……、これは石像なんかじゃないぞ……、金属で出来ている……、ロボットか？ ……いや、中は有機物だ。なんだこれはっ？！ 生命反応だと？！ おいっ！ クインシーっ！」

ライオネルが振り返ると、石像の胸の部分から操縦席と思われる物がせり出して、クインシーの目前に降りていた。

クインシーがそこに腰掛けると、自動的にシートベルトが装着される。

「おいっ！ クインシーっ！ 待てっ！」

「ライオネル！ これは石造りのハリボテじゃないぜ。巨人とは、強力な力を秘めた戦闘ロボットの事だったんだっ！ 見るよ、操縦パネルも我々の物と似ているぞっ！ 今から動かしてみるからな、見てろよっ！」

左右の手元に有るエメラルドグリーンの半球にクインシーが両手をかざすと、操縦席は上昇し巨大ロボットの胸に収まった。

同時に、大地に唸るような振動が伝わり、金属の軋む咆哮がその巨体から響き始める。

「クインシーっ！！」

岩肌と同色だったロボットの巨体が次々と変色していく。

頭部は白く、それ以外の身体は深紅に染まる。

ゴーグル状の目がグリーンに点灯すると、大地を揺るがし巨人が立ち上がり始めた。

「クインシーっ！！ うっ、うわーっ！！」

振動のあまりの激しさは、ライオネルが自らの足で立ってられない程だった。

全高三百メートルのロボットが立ち上がる。

衝撃で祠の岩肌が次々に崩れ落ちて来る。

もうもうと巻き上がる砂煙。

吹き抜ける風が、視界を徐々に切り開いていく。

眼前に直立する巨大な影。

その巨体は恒星からの光を反射して、眩いばかりに深紅に輝いていた。

まさに伝説の紅い巨人、そのものであった。

巨人の胸の部分が開くと、何かが飛び出した。

それは空を舞い、風に弄ばれながらヒラヒラと落ちて来る。

目の前にフワリと落ちたそれを認識すると、驚怖のあまりライオネルの身体を痙攣が襲う。

無数の穴が空き、紅く染まった宇宙服。

砕けて変形したヘルメットのシールドから覗くのは、ミイラのように干涸びて収縮した顔。

それは、クインシーの変わり果てた姿だった。

「うっ、うわーっ！！」

地面に伏していた身を起こすと、ライオネルは一目散に逃げ出した。

全身が震え、力が入らない。

脚が思うように動かない。

逃げなければ！ とにかくここを離れなければ！

心が焦る。

ようやく神殿を通り過ぎた時、背後を振り返ったライオネルの顔は更なる驚怖に歪んだ。

紅い巨人が動き出したのだ。

「ひいっ！！」

必死に走る。

走る！

走る！

走る……。

「息が……、息が……」

苦しい。

「ハアッ……ハアッ……ハアッ……」

自分の喘ぐ音がやたらに大きくヘルメット内に響く。

喉を押えながら走り続ける。

額から流れる汗が目に流れ込む。

脚がもつれる。

その時、砲撃のような音を伴い地響きが襲った。

振り返ると、巨人が足をこちらに向け一歩踏み出している。

来るっ！

「主よ、助け給え！ 守り給え！ 主よっ！！」

ライオネルは震える声で神への祈りの言葉を叫び、更に走った。

「ハアッハアッハアッ……」

再び爆撃のような音と振動が、耳と身体を突き抜ける。

「うわっ！！」

そのはずみで、石畳の段差に足を取られ転倒する。

勢い余って転がるその身を止めて必死に起き上がる。

立ち上がって振り返ったその時、ライオネルの視界を巨大な掌が覆った。

巨人に掴まれて持ち上げられるライオネル。

もはや発する声は言葉にはならない。

ライオネルの眼前に迫って来る物。

それは巨人の胸に開いた操縦席……。

否、それは操縦席と呼ぶには程遠い代物だった。

生物の内蔵を思わせる赤黒く湿った内壁。その全てから針状の突起が無数に飛び出し、蠢いているのだ。

吐き気が襲う。

喰われるっ！！

そんな言葉が脳裏をかすめた瞬間、ライオネルはその中に放り込まれ、扉が堅く閉ざされた。

「ギャーッ……」

一瞬洩れ出した断末魔の叫びは、巨人の金属の軋むような咆哮がすぐに掻き消した。

巨人の身体がさらに鮮明な紅に染まっていく。

そして、静寂……。

砂を巻き上げる風の音だけが古代遺跡に響く。

しばしの後……、

巨大な影が、ふと消えた。

紅い巨人は宙に舞っていた。

恒星からの光に照らし出されながら、瞬く間に薄紅の雲間を抜けて行く。

神殿の前にヒラリと舞い落ちる物……。

紅く染まった穴だらけの宇宙服。

胸の階級章が、ソドム軍の軍曹である事を示していた。

―― エピローグ ――

後に、第六植民星ゴモラを脱出した軍の最高幹部が、自身の回想録の中で、巨人についてこう記している。

ソドムの新兵器と思われた巨大ロボットは、その両腕から発する強力なレーザーサーベルの一振りです。瞬く間に我がゴモラ軍の宇宙艦隊を殲滅させた。

ソドムに反撃するため、私は最終兵器を使用する決断を下した。

だが、そんな折り、新たに打ち込んだスパイ衛星がソドムの異常を伝えて来たのだ。

炎上するソドムの都市郡。宇宙艦隊を始め、軍隊という物が全く見当たらない。私には何が起きているのか、まるで理解出来なかった。状況を把握するためにソドムに偵察隊を送り込む。

偵察隊から送られて来た映像。それは我がゴモラ軍を……、いや、人類を驚怖に陥れるものだった。

ソドムの人々は、巨大ロボットに喰われる家畜と化していたのだ。

ロボットに喰われると言うのも、おかしな話だが……。もしかすると、あれはロボットの形をした知的生物なのかもしれない。

日々、生け贄と称して、数人の血肉が捧げられるその様は、まさに悪魔の儀式と言えただろう。

我々は被害が自分達に及ぶ前に、自ら故郷の星ゴモラを捨てる決心をした。

そして、別の星系で新たに開拓中の第九植民星ツォアルへと移住する道を選んだのだ。

最後に、全人類に向け警告する。

第五植民星ソドムには決して近づいてはならない。

もしもその地に降り立つような事が有れば、紅く血塗られた巨人が、宇宙を支配する程の力を以て、必ずや禍いを成し、その民を滅ぼすであろう。

あなた方は、これを後世に語り継ぎ、ソドムを禁断の星域として何人も近付けてはならないのだ。

第六植民星ゴモラ軍

第四十三代最高司令官

Lot.M.Jackson